

お稲荷さん

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第十一号（毎月一日発行）
平成二年八月一日

古平烽火所異説

上 吉川 義雄

「丸山の頂上に『烽火所』があった。」という説はいかにもありそうなことで、積丹半島の中心集落・古平場所は警備上でも重要な位置にあった。今から二百年以上も前のことで、外国船の来航は幕府にとつても松前藩にとつても頭の痛いことであつたに違い無い。

千島を含む北海道全域を警備するなどということとは、幕府ですら出来ない相談で、幕府から松前藩に、そして松前藩から各場所請負人へと厳しい通達だけが先行していて、武備など実が伴うようになったのは明治に入ってからである。
さて、「烽火所」はその頃の所産であり、外国船来航の急変

を告げる最初の情報伝達方式なのである。映画などで観るアメリカインディアン「のろし」のように、煙の断続などでその内容を或程度伝達するテクニクなどは無かつたようだ。

寛政九年（一七九七年）大原金吾著『北方危言』を要約すると、「山小屋のように丸太を高く組み、その上に薪や柴などを積上げ、ふだんは覆いをして置

お稲荷さん

お稲荷さんは、沿岸至る所に赤い鳥居が立ち祠があつて「正一位稲荷大明神」のほりが、風にたなびいている。

大晦日の夜、山程の供物を捧げ、お稲荷さんの大好きな

く。そしていざという時は火をつけて、小屋ごと焼き捨てる」とあり、その信号法としては、「外国船が沖合いに来た時はその土地（一国）だけの問題として烽火は一つだけ。その土地に乗り込んで（上陸）来たら官へ注進のため二つの烽火をあげ、隣の国も順次二つづつあげていく。若し攻めかかつてきた時は三つあげて変事を知らせる。」

烽火所の傍らに「守護の番所を嚴重につけて、望遠鏡、天度測量、町間見積りの器などを備え、それを使える技術者を常に交替で置くこと。」などある。

ここで大事なことは、「外国船が港の中に見えて、昼夜人を走らせて訴えようとしても、外国船はその間に数十里も走り、

どうしたらよいかと伺っている内に、はや数百里の別の港に処を替えているだろう。」という子見までしていることだ。

（以下次号）

※筆者を知る人は古平に多いのですが、元・町史編纂委員として、古平町開基八十五周年を記念して編纂された『町史ふるびら』を執筆されました。現在は、札幌市に在住

△7月の山木市

■種田富太郎が道会議員に二期連続して当選（聊三・七年）

■豪雨で古平川堤防が決壊、鴨居木分教場付近が泥の海となり、田畑が埋まる（五年）

■小樽より近海汽船主催の周遊団が来町、歓迎する（六年）

■小樽へ入港した軍艦見学のため団体客を募集する

■料金大人一円二十銭（八年）
■禅源寺観音堂で、観音像開眼法要を行う（九年）

起縁場

今年の鯨の吉凶を占う。大漁の年は、召し上がりようが多いのだそうだ。「これだバア今年吉だデ」とほくそえんで、ペコリとおじぎをして帰って来る。

故郷を想う

福井幸三

—— 中体連のソフトボール大会も終わった。

決勝で敗れ、生徒と一緒に泣いてしまった。

「また、来年がんばろう！」
三年生はよく戦ったと思う。反省点も多々ある。彼女等にとっては思い出の多い、美しい純粋な涙だった。毎年のことだが、一人一人が私の心のアルバムに残るだろう。随分叱つたり無理を言ったが許したまえ。

三年の彼女等が私の手をはなれ、これからどんな人生があるのだろうか。ともあれ、皆幸せになつてくれるのを祈るのみ。

(七月十四日・晴・中島グラウンド、私の日記より)

さて、数えて七十歳の今日まで、こんなにスポーツとかかわりが続くとは吾ながら思つてもみなかった。勿論、私には外に能力もないので、好きな柔道・

野球・ソフト・スキーと、ただ好きなこと一途にのめり込んだ。

あと残された人生長いとは思わぬが、良き先輩、後輩に支えられ励まされ、この道を行くより途はなし。まあグラウンドに立つて、山のスロープに立つて、改めていま青春だ、この一瞬が私の青春だと、から元氣を出して？ お前は静かな年相応なわび、さびのある深い、心の広い人生が解らないのか、駄目な奴だなあと思うことがしばしばあるよ。

どうしてこんなにスポーツにのめり込んだのか、不思議でならない。大した選手にもなれなかつた私が——。

小学校の何年生の時か忘れたが、べんてん山でスキー大会があつて、少年の部で私が優勝し、生まれて初めて新聞社のメダル(桐の箱に入つて)を手にして感激した。勿論、翌日の新聞には私の名前がはっきり出ていた。運動会でノートや鉛筆をもらった時より、あの桐の箱に

入つたメダルはほんとうに嬉しかった。

今と違って、技術はテレマーカーが流行で、子ども心にもイゲタサン(×)の兄さんの技術が憧れの的だった。スキー用具も高価な時代で、家庭的にも恵まれたお坊っちゃんのやるスポーツだったようだ。私なんか折れたスキーを、仲谷さんのお父さんに鉄板で継いでもらい、それで満足して滑っていた。それでも、「このスキーは桜の木なんだ」と、自慢して大切にはいていた。

新しいスキーは、自分で働いた金で渡辺さんから買ってはいたが、お客さんの第一号だったように思う。技術も先輩に教わり、ワックス、メジューム等は兄のを遠慮がちに使い、手のひらでこすつて塗つたものだ。

(以下次号)



■ 鉄道省の一行が鉄道敷設請願を受けて、余別村までの現地視察をする (十年)

■ 積丹沖を震源とする地震が発生する (十五年)

■ 高野平治ほか三人が、古平小学校に二宮金次郎の銅像を寄付する (同年)

■ 余市町で行われた相撲大会で古平国民学校の児童が、団円で三位に入賞する(十八年)

■ 東京大相撲・横綱前田山一行が興行する (二十二年)

■ 日本画家、日展委員今中素友が来町する (二十三年)

■ 古平漁業協同組合設立総会が開かれる (二十四年)

■ 第一回古平町民運動会が中島グラウンドで行われる(同年)

■ 吉田一穂作詞「古平小唄」を作曲した八州秀章が歌唱指導する (二十九年)

■ NHK全国盆踊り大会に古平盆踊りが出場する(同年)

■ 歌棄で国道の建設作業中崖崩れがあり二人死亡(三十年)

■ セタカマイ隧道の竣工式が行われる (三十一年)

草むらの頭がい骨を納骨 今年《五十回忌》供養

昭和十六年九月、六志内で営林署の林道の草刈りをしていて小野寺末治さんの鎌に、とつぜん、カチリと当たるものがあつた。何気なく見ると、明らかにそれは人間の頭がい骨だつた。

その時、いっしょに作業をしていたのは、小野寺与三郎さん、小沢祐雄さん、小野寺弥惣治さん、小野寺由太郎さん、関川与吉さんの合わせて六人であつた。

人骨であることからこれを早速警察に届け、蓮見医師の鑑定を受けたところ、これは、「女の頭がい骨」であることがわかつた。

そこで六人は「これも何かの因縁」と、禅源寺に話し、納骨堂に納めた。

ところが、この話には後日談がある。

それから三十数年後——。昭和五十一年の月も同じ九月

のこと。そして、場所もまた同じ六志内で、当時の新聞を賑わしたミステリーがあつた。

北海道新聞・九月十四日付けの記事の概要を紹介すると、

「六志内峠で国道傍らの緑化作業をしていた、三井東洋化学北海道工業所主任の福田弘さんは、一枚の工事現場の写真を見て思わず息をのんだ。その写真には、時代がかった若い男女の姿がくつきりと写っていたのだつた。この男女、ちよんまげに着物姿で江戸時代風。この部分だけ青みがかつて、草むらから浮き上がっているよう。」

念のため、道新の記者が調べてみたところ、はからずもそこは、三十数年前の頭がい骨を発見した場所と一致していた。

この因縁めいた成り行きに驚いた小野寺弥惣治さんが、健在で居た小野寺末治さん、小野寺由太郎さんの二人に相談した。

「納骨したままになっているあの時の頭がい骨を、これから、我々の手で五十回忌まで毎年供養をしようではないか。」

これには二人も賛成して、以後、毎年供養を続け、今年がその五十回忌の年になった。

八月十六日、禅源寺で五十回忌法要を行うことになっているが、当時、六人居た仲間も今では、小野寺弥惣治さんと小野寺末治さんの二人になってしまつた。

六志内とは、アイヌ語で「川筋にある道」の意と一般に考えられていた。アイヌが獵などで歩いたり、また、和人が旅をしていて事故死したのでは——とか、「道理で車が草むらに突っ込んだり、この辺りでの事故が多い」などと、この話題でもちきり。

工事の関係者も「事故につながつては大変」と、その後、供養祭が行われた。

(これは、小野寺弥惣治さんの談話と、北海道新聞の記事をもとにしたものです)

■ 海岸道路の開通によりバス料金値下げになる(三二年)

■ 戦没者百八十七柱の合同慰霊祭が行われる (同年)

■ 山口開発庁長官が古平漁港を視察する (三三年)

■ 古平中学校でNHK「声くらべ腕くらべ」の公開録音が行われる (三四年)

■ 古平町母子会が結成される 会長 富田 恒 (三五年)

■ 古平小学校同窓会が会誌「白鳥古丹」を発刊する(同年)

■ 沖小学校が廃校式を行う。明治十三年開校、八十四年の歴史を閉じる (三九年)

■ 明和小学校が廃校式を行う。明治四十三年鴨居木分教場として開校、五十四年の歴史を閉じる (同年)

■ ソ連のスケソ輸入に反対、漁民大会が開かれる(四一年)

■ 吉田一穂を迎え、鎮魂歌碑の除幕式を行う (同年)

■ 古平・神恵内間、国道二二九号線が開通する (四二年)

■ 古平町柔道・スポーツ少年団が結成される (同年)

昭和八年四月三十日付
〈小樽新聞〉より転載

自動車よりも 多過る運転手

★本道の自動車総数二千七百七台

スピード時代の出現で超特急が現われ、馬車や荷車、人力車が自動車に蹴飛ばされてしまつたが、一本本道には何程の自動車があり、そして、年に何程の増加率をもっているか、今、道庁庶務課の調査によって見るに、七年八月末現在で本道自動車総数二千七百七台（内乗用一、二四九、貨物用六六七、特殊用一九一）で、過去十ヶ年の増加する勢を見れば、

大正十二年	二〇六台
同 十三年	二五三台
同 十四年	三二七台
昭和 元年	四八六台
同 二年	五〇五台
同 三年	八〇八台
同 四年	一四一七台
同 五年	一八二五台

同 六年 二〇一台
同 七年 二二〇七台
となり、なほ運転手の増加する勢をみれば、

昭和 二年	七六七人
同 三年	一〇九八人
同 四年	一五六〇人
同 五年	二一四七人
同 六年	二九一九人
同 七年	三二四一人

で、いささか車台数の増加に比して多過ぎる感がある。

では、現在全道の自動車の台数はいくらあるのか。
二百八十二万二千八十四台（平成二年五月末現在・札幌陸運支局）で、約半世紀の間にざつと千三百四十倍にも増えている。

次に、古平町を見てみよう。
昭和八年（四〇七年は不明）乗合自動車（懐かしい名前です）が六台あった。これは、札幌自動車合資会社が種田自動車を買収して、余市駅前から余別村まで運行していたもので、中古の幌型フォード車である。

しかし、自動車会社も経営していた種田さんでは家用車を所有していたというから、この中にはそれが入っているのかも知れない。

現在の自動車保有台数は二千四十二台というから、これは昭和七年ごろの全道の自動車保有台数とほぼ同じである。

このころ、自動車の値段はどのぐらいしたのだろうか。

昭和十年以後になるが、ダットサン（七百二十cc）が千六百五十円だったが（日産自動車KK）、中古のフォード車はこれより安かったという。

当時、古平町長の月給が百三十五円だったから、ざつと一年分の給料がなければ車は買えなかつたのである。自転車でも、国産の新車は五十円から七十円であった。

新聞の三面記事から話題を広げてみましたが、《昭和》という時代は、生活の変わり方が急激で、しかも物価が異常に急騰した時代であつたということがいいそうです。

■山林に薬剤散布をしたため、古平川で水泳禁止（四七年）

■港町子供育成会を結成する

会長 横川時子（五十年）

■古平小学校開校百周年を記念して「ふるさとの礎」を建立
除幕式の後、町内を祝賀パレードする（同年）

よとが

以前、観音滝へ行く川沿いの道ばたに、西国三十三所にちなんで三十三体の地藏さんがまつられていました。

ところが今は三体しか無く、禅源寺や正隆寺に移されているものもありますが、そのほかは各所に散らばっているようです。秋までにはその所在を確かめて記録に残したいと思っています。ご存じの方が居られましたら教えてください。

資料の収集と並行して、高橋忠雄さんのご協力を得て町内のスライド撮影をしています。百枚ぐらいにまとめて解説書もつくり、わが町を見直してみたいと考えています。